

学 僧

静かな夜である。

夜鳥が渡つてゆくのか、怪奇な声が、比叡の峰々にこだましてゆく。経机を前に端然として座した蓮長は、灯の火をみつめながら、脳裡に去来するものを追うてみるのであった。

叡山三千人の僧侶の内に真に仏道を志すものは、果して何人あるであろうか。

伝教大師がこの山を鎮護国家の道場として、根木中堂を建立せられたのは、桓武天皇が奈良の都を、京都にうつされた六年前の延暦七年、大師二十二歳の時といわれておる。ご本尊には等身の薬師如来を自らきざんで、根木中堂に安置せられ信仰のしるしとして、自ら火を打って、永劫不滅の燈明を献ぜられて、

「明らけく後の仏の御世までも、光り伝えよ法のともしび」

と詠ぜられたと伝えられている。その燈明は寛元元年の今年に至る四百五十五年の間、一度も消えることなく、今も中堂の真中に輝やいて、静かに油をすすっているのである。非情の器物は昔

に変わることなく往時を伝えておるが、人の心はその昔に似るべくもなく、こうも変り果てるものであろうか。

桓武天皇より「東大寺、興福寺は七宗を弘むと雖も鎮護国家の名は叡嶽の靈窟にあり」と言われ、入唐求法した伝教大師は、延暦二十四年遂に天台法華宗をこの山に創立し、滅後六年の天長四年五月大乘戒壇院が勅造せられて、大師の誓願は満足せられ、叡山の威光天下を圧するの觀があつた。これに対抗した弘法大師は伝教の滅後一年目の弘仁十四年正月十九日に羅生門の左大寺を授けられ嵯峨天皇より教王護国寺の勅願を賜つた、これ今の東寺である。これは高野山が京都を去ること遠く、玉体安穩、鎮護国家の祈禱を捧げるのに不便であつたから特に京都にその寺を賜わり、東寺の長者として弘法大師を招いたのであつた。

叡山のみが桓武天皇のお言葉の如く長く長く鎮護国家の道場であらうと、こい願つておつたのに、伝教滅後一年にして、洛中にも鎮後国家の道場が出来たのである。叡山の門徒は必ずや悲憤にくれたに相違ない。そこで前述の如く天長四年に、大乘の戒律は叡山において受くべしという戒壇院の建立が勅命せられて、叡山門徒大いに仏教界に鼻を高くしたのだが、その鼻は天長七年弘法大師が「十住心論」を著述してくじきさつたのである。弘法大師はその著書において、眞言こそ鎮護国家の秘法である。法華經には鎮護国家の理論はあるが、鎮護国家を祈禱する所の実際の修法がないではないかと、天台法華宗を下したのである。暗に大乘戒壇院も否定せられ、叡山

の威光一時に消えたかの観があった。

ここにおいて、第三祖円仁慈覚大師は、真言の秘法を支那より伝えて、当時流行の祈禱仏教を興行しなければ叡山は滅亡の外なしとみて承和五年（伝教滅後十六年）より同十四年に至る十年間、支那に留学して真言を伝え、傍ら禪念仏等も受け来つて、今後なにが仏教界に流行しようと、さしつかえないような慎重な態度をとつたのである。ついで第五祖円珍（智証）も仁寿元年より仁寿三年に至る三年間、支那に渡つて真言を伝えてきたので、弘法大師の東寺のみが真言を誇ることが出来なくなり、逆に叡山の真言の方が、弘法の真言より三十年程新しいという魅力も加わつて、かえつて東寺の真言を圧倒せん程の気概であつた。かくて円仁、円珍の二人の努力は、弘法大師に対抗して、叡山の勢力は挽回したが、後日の争いの種を蒔いていつたのである。この二人の滅後九十年、天元四年になると、円珍即ち智証の門徒は、叡山における円仁即ち慈覚門徒の行政人事における横暴の非をならして、ついに山をくだり、円珍が賜つた三井の園城寺を本拠としてたてこもり、堂々と比叡山上における慈覚門徒の失敗をなじり、暴力をもつてもこれを打倒せんとしたのであつた。よつて時の座主十八代の良源は、愛山護法と称して兵士を養ない、ここに山法師の暴力団が生れたのであつた。当然園城寺方も対抗上荒法師を養成した。かくて、蓮長法師が叡山に登つた仁治三年に至る三百年間、互に鎬をけずつて打ちつ討たれたの大合戦は五十六回余に及んでおつたのである。

「あのくたら三みやく三菩提の仏たち、わが立つそまに冥加あらしめ給へ」

と伝教は有名な歌を詠じて比叡山に延暦寺を創立せられたが小世は末世の故か、三みやく三菩提の仏たちの威光は全くおとろえて、これを守るものは山法師の刀杖であり長刀であった。

法華経、仁王経、金光明経を鎮護国家の三部として毎日転読して満山をくるわした読経の声は、すでに昔のことですぐに代わるものは、三井園城寺の襲撃を恐れて、日夜そなえる山法師の剣術の声であった。叡山は、最早単なる寺院ではなかった。座主は一方の雄将であった。洛中に一度合戦があれば、その勝敗は叡山が決定する程の勢力をもっていた。源平の争乱、承久の変にも与って力あるものがあつたのである。叡山三千人の衆徒と普通に言うが、それはあく迄も平時のことで、一度号令を下げば二万の衆徒が山上に蟄集するという一大兵力団であつた。

白河法皇をして「鴨川の水、賽の目、叡山の衆徒」と、意の如くならぬものに数えさせたのは、今以つて誰も知る話である。

鎌倉は幕府が出来ると、北条の執権職は、代々なんとかして、この叡山の勢力を、そがんものとして考へて叡山の宿敵たる三井園城寺を後援し始めたので、叡山の衆徒は自衛上益々武力を蓄積し剣道に励まねばならなかつたのである。

この環境において、仏道を志ざして修行するものは、山法師よりも、もつともつと胆力がいり勇気が必要であつた。青白い学僧の部屋に、般若湯に顔を真赤にした山法師が乱入して、経巻を

書籍をふみにじる乱暴狼籍をはたらくのは、毎夜のこと、決して珍らしくない風景であった。

みよ。蓮長の端然として経机に座したその後ろ姿には、寸分のすきもないではないか。鎌倉遊学四か年、殆んど鶴が岡八幡宮寺の一切経蔵にとじこもり、遂に法華経を見いだし、法華経こそ仏の正意なりと秘かに確信して、その法華経八軸を地中に埋めて創建されたといわれる天台法華宗の叡山に、百五十里の道程を経て、登り来たってみれば、最早やそこは寺でもなく仏教の最高学府でもなく、目夜剣撃のひびきが聞える所となっていた。

伝教大師の精神は何処にあるのであろうか。法華経によつてたてられた、この天台法華宗の叡山の乱脈、これは一体何を意味するのか。

仏の正意は法華経にないのか、あるのか。

.....

蓮長の想念にかかわることなく、叡山の夜は静かに更けてゆくのであった。

